

【資料2：児玉三夫】

図書新聞への寄稿文
コッタ版 ペスタロッチー全集の品位と価値
(昭和48年7月28日)

児玉三夫

青春時代の出会い

戦前、中学四年生の頃であったか、兄鱒坂二夫が初出版の二つの小冊子を贈ってくれた。一つはルソーの『エミール』抄訳で、他の一つはペスタロッチーの『隠者の夕暮』であった。若き日の私にとって両冊子がいかに衝動的であったことか、その時の感激と印象は忘れられない。ちょうど思春期へ入った年頃、心身の変化動揺におののきながら、未知の世界への驚きの目をもって自己を拡張せんとするかと思えば、また自己に沈潜せんとする、誰もが多かれ少なかれ体験する、あのあわい憧憬と希望、また驚異と不安に満ちた人生の若き時代のことである。

生家の両親がかつて教師であったことなど生活環境の影響もあって、その頃以来、私は教育者としてのペスタロッチーの人となりと思関心に関心をいただき、伝記を通して親しむようになった。東大で教育学を学んだのもそのためでありその後の教育現場での諸経験にもそうした影響が支配していたことは間違いない。ペスタロッチーへの思慕と彼の教育実践へ少しでも接近してみたいという念願であった。戦争末期の応召で、中国の戦場へ携行した本は二冊、『万葉集』（文部省撰）とペスタロッチーの『隠者の夕暮』であった。

戦後は教育現場での実践に追われながら、研究らしい仕事は殆どできずに経過してきたが、ペスタロッチー研究への志向は、まず彼に関する文献蒐集と彼の教育実践の遺蹟巡りとして生きつづけた。十六年前の夏、欧米視察の際チューリッヒのペスタロッチー記念館を訪れた。また、五年前の春、中近東教育視察の際にイスタンブールからアテネ・ローマ経由でチューリッヒに廻り、彼の遺蹟を訪れながらジュネーヴに至った。一昨年はアムステルダムを振り出しに西独・オーストリア・英国の図書館や書店を廻り、チューリッヒを根城に二週間滞在、スタンス・ノイホーフ・ブルック・ビル・ブルグドルフ・ミュンヘンブグゼー・イヴェルドンを訪ねた。

コッタ書店を訪れる

この時パーゼルの書店で『リーンハルトとゲルトルート』の初版四冊を入手したのは真実嬉しかった。昨年秋、ソ連東欧の教育視察の帰途、私はコペンハーゲンからチューリッヒに出て、一昨年と同じ遺蹟を再度訪れた。何がそうさせるのか自分でもよくわからない。ただ三度にわたる訪問で気付いたことは、ペスタロッチーにゆかりのある建物の多くが、長年の風雪のため相当損傷がひどく、補修を行っていて建物の構造や色彩が変わりつつあることである。こうした事実からも、私はこの数年間にわたってフィルムに収めた資料を大切にせねばならぬと考えるのである。

昨年秋の滞欧中、ストウトガルトに、ペスタロッチーと関係深かった

遺蹟巡り書店巡りのすえに



ペスタロッチーと孫ゴットリーブ

完揃は入手困難
今秋、完全復刻

コッタ書店を訪ねた。日本における明治以来のペスタロッシー研究の実情を話し、殊にペスタロッシー生前の最初の彼のコッタ版全集を、学問研究の目的という条件で日本において復刻することの許可を求め、同書店の同意を得、契約書を作成できた。帰京後、復刻出版に極めて勝れた業績をもつ東京の雄松堂書店がこのコッタ版の完全復刻を快諾引受けてくれた。しかも二百部限定（番号入り）でコッタ書店との契約書にある「商業的利益なしの、学問研究の目的」という約束の通り実費だけの復刻である。この話の進行していた昨年秋、チュービンゲン大学のO・F・ボルノ博士と歓談の折、この復刻の話をした際、ドイツでも最近の若い学徒でペスタロッシー研究をする数が減ってきたと歎いておられ、日本でのコッタ版の復刻を大きな期待をもってしていると喜んで下さった。

人間救済の教育

さて、ペスタロッシーの全集出版の計画はイヴェルドン学園の初期、既に彼の友人達によって奨められたのであるが、結実するまでに至らなかった。約二十年続いたこの学園も世界初等教育のメッカとして慕われた最盛期を過ぎ、殊に一八一五年には学園を支える陰の力であった彼の妻アンナを失い、また学園の指導勢力をめぐっての弟子同僚間の不和と軋轢とが顕在化し始め、加えて学園経営の困難と学園教育への批判が起こりつつあった。にもかかわらず年老いた彼の心に去来したものは、教育の方法技術の巧拙の論議でなく、彼の終世の念願であった人間救済の教育という理想の実現であったに違いない。この全集は晩年の彼を、弟子シュミットが手伝い、編集が進められ、コッタ書店との間に予約出版の形で刊行された。当時のヨーロッパの君主、諸侯など多くが彼の事業を援助しようとして、この予約に応じた事実は、この全集の巻頭を見れば明らかである。

一八一九年より二六年にわたって刊行されたこの全集には、どのような理由からか、一七八〇年の重要な文献である珠玉編『隠者の夕暮』が掲載されていない。また第十四・十五巻中に彼によって書かれたものでない、弟子シュミットによる論文が載せられている。そうしたことから、この全集に対する評価が、編集の不備とか、弟子シュミットによる専断などと後世の編集者達によって指摘されている。たしかにそうした事実はあったにせよ、彼の主要な著述は殆んど含まれ、例えば『リーन्हルトとゲルトルート』『私の探究』『立法と嬰兒殺し』『スタンツだより』『ゲルトルートは如何にしてその子等を教えるか』『レンツブルグの講演』『基礎教育の理念に関する見解と経験』『新年講演』の諸編、『白鳥の歌』などがそれぞれである。しかもこの全集には、ここに初めて掲載された著作『白鳥の歌』など八点が加えられている点も見逃すことはできない。

二十世紀の決定版

私の手許にあるペスタロッシー全集の中には、彼の歿後に出版されたもので、ザイファルト編のブランデンブルグ版（十八巻・一八六九—七三）、リークニッツ版（十二巻・一八九九—一九〇二）、ブッヘナウ・シュプラランガー・シュテットバッハー等の編集で始まった、いわゆる批判版（二六巻予定・現在十九巻刊行・一九二六—）、生誕二百年を記念したラッセル版（十巻・一九四五）、ロオタッフェル版（八巻・一九四五）のほか、選集としてはマン編（四巻・一八六九—七一）が最もよく編集されている。なお前記全集中ではリークニッツ版（十二巻）が現在までの完編であり、現在刊行中の批判版はそれぞれが完結した暁には、その内容編集の上から最も有効な文献、二十世紀の決定版と称するものになると思う。

以上の各全集に比べ、たとえ編集上の不備はあるにせよ、ペスタロッシー生前唯一の全集としてのコッタ版の価値は、いささかも減ずるものでなく、むしろ歿後の諸編にみられぬ品位と権威を具備している。このコッタ版全集は現在の日本では勿論、ヨーロッパでも仲々完揃えを入手することは困難である。私は機会あってこのコッタ版ペスタロッ

チー全集（十五巻・一八一九―二六）完揃を二部所蔵しているが、ペスタロッチー研究には不可欠の原典であり、歴史的価値を有する文献であると考え。今後この原典の復刻版の半数でも保存されれば、後世のペスタロッチー研究に資すること多大であると思う。

『隠者の夕暮』添えて

なお、前記の雄松堂の好意によって、このコッタ版全集の復刻には、付録文献として一七八〇年イゼリン主宰のエフェメリデン紙上に無名で載せられた『隠者の夕暮』（バーゼル大学図書館蔵）原典のコピーと、一八〇七年イヴェルドン学園の発行した『人間教育の週刊紙』に掲げられた『隠者の夕暮』と、『隠者の夕暮』草稿（チューリッヒ中央図書館蔵）のコピーを別冊で加えることができた。コッタ版全集に欠けた『隠者の夕暮』の文献としてはこれ以上のものはないと確信する。

また、ペスタロッチーは、一八一九年イヴェルドン郊外のクリンデイに貧児のための学校を開設した。この学校は一年余で、イヴェルドン学園に合併されるに至るが、その頃英国より来訪し彼の下で研修していたグリーヴスが特にペスタロッチーより幼児教育に関する手紙を受けていた。グリーヴスはペスタロッチーの歿した一八二七年、ロンドンで英訳『幼児教育の書簡集』を出版した。（この本は独文書簡の英訳であるが、その原文は未だに発見されていない。ドイツでは一九二四年に『母と子』と題してこの英文書簡集を再独訳の上出版した）これは彼の幼児教育の思想を研究する上で極めて貴重な文献であると考え、付録別冊として英文原典（初版）のコピーを加えた。ペスタロッチーの研究の大切な資料となることを信じて疑わない。

【解題】

図書新聞への寄稿テーマ：

児玉三夫先生「コッタ版『ペスタロッシー全集』（全15巻）のもつ品位と価値」

図書新聞（昭和48年7月28日付け）

解題

鯨井俊彦^{*}

目次

はじめに

1. 児玉三夫先生のペスタロッシーとの邂逅について
2. ペスタロッシー生存中唯一の『ペスタロッシー全集』コッタ版について
3. コッタ版『ペスタロッシー全集』に収録された作品名及びその内容概要について
4. コッタ版『全集』復刻に当たって、付録別冊2冊が加えられた経緯について
5. コッタ版『全集』以後出版された『全集』各版について
6. 児玉三夫先生長年の「ペスタロッシー研究」の功績によりペスタロッシー教育賞を授与される（広島大学から顕彰される）

おわりに

ペスタロッシー略年譜

はじめに

大見出し項目 … 遺跡巡り書店巡りのすえに／完揃は入手困難／今秋、完全復刻

小見出し項目 … 青春時代の出会い／コッタ書店を訪れる／人間救済の教育／二十世紀の決定版／『隠者の夕暮』
添えて

以下、上述の「小見出し」の項目に沿って解題していきたい。

1. 児玉三夫先生のペスタロッシーとの邂逅について

{青春時代の出会い} … ペスタロッシーとの出会いは旧制中学4年次に始まる。

ペスタロッシー研究への志向は、まず彼に関する文献蒐集と彼の教育実践の遺跡巡りとして生きつづけた。

{コッタ書店を訪れる} … 児玉先生はバーゼルの書店で『リーンハルトとゲルトルート』の初版4冊を入手された。その後、昨年秋（1972年秋のこと・4度目の滞欧中）、ストットガルトに、ペスタロッシーと関係深かったコッタ書店を訪問。日本における明治以来のペスタロッシー研究の実情を話し、殊にペスタロッシー生前の彼のコッタ版『全集』を、学問研究という条件で日本において復刻することの許可を求め、同書店の同意を得、契約書を作成できた。帰京

^{*} 明星大学名誉教授

後、このコッタ版の完全復刻を東京の雄松堂書店が引受けてくれた。そして、コッタ書店との契約書にある「商業的利益なしの、学問研究の目的」にそって200部限定（番号入り）で出版することになったのである。1973（昭和48）年に発行された。

このコッタ版を復刻する話が進行中のある時、児玉先生がボルノー博士^(註1)との歓談の折、ボルノー博士は「ドイツでも最近の若い学徒でペスタロッチー研究をする人が少なくなってきた」と嘆いておられ、だから、この復刻のもつ意義には大変期待を持っていると話された、と後年児玉先生から伺った思い出がある。

2. ペスタロッチー生存中唯一の『全集』コッタ版について

{人間救済の教育}・・・コッタ版『全集』15巻は1819年より1826年にわたって出版された。

このコッタ版（Die Cottasche Ausgabe）はシュトゥットガルト・チュービンゲンのJ・G・コッタ書店（発行者コッタ〔J.F. Cotta 1764~1832〕の名前をとって名づけられた書店）から、ペスタロッチーの生存中に出た唯一の『全集』、ペスタロッチーの最晩年、彼の信頼を得たJ・シュミットの編集関与の下で、1819年から26年までに全15巻が出版された。すでに単独で刊行されていた主著『探究』『ゲルトルート児童教育法』『純真者に訴える』などに加え、『リーンハルトとゲルトルート』の改訂第3版、『産業・教育および政治についての見解』『白鳥の歌』『ランゲンタール講演』他が収録されているが、当時の政治的な事情により、革命時代とヘルヴェーチア共和国時代の諸著作は、大部分収録されなかった。また『隠者の夕暮』『わが生涯の運命』など、多くの重要な論著も未収録に終わった。本『全集』には、J・シュミット、J・ニーデラーが手を加えた稿本が、少なからず含まれている。

以下、その理由と出版の経緯を述べていく。

ペスタロッチーの『全集』出版の計画は彼の友人達によって早くから進められていたが、結実しないままだった。その理由は、ペスタロッチーが始めたイヴェルドン学園（約20年続いた世界初等教育のメッカとして慕われた学園）の指導勢力をめぐっての弟子同僚間の不和や軋轢が顕在化、学園経営の困難と学園教育への批判が起りつつあったこと、加えて1815年には学園を支える陰の力であったペスタロッチーの妻アンナを失ったことなどが挙げられている。このような中で、ペスタロッチーは彼の終世の念願であった人間救済の教育という理想を実現することであった。

この全集の編集は、晩年のペスタロッチーを弟子のシュミットが手伝う形で進められ、コッタ書店から予約出版、刊行された。購読者の予約名簿を見ると、当時のヨーロッパの君主、諸侯など多くが彼の事業を援助しようとして予約に応じている。この事実を受けてペスタロッチーは『全集』の巻頭でそのことに触れている。

このコッタ版『全集』には、ペスタロッチーが家計簿の裏を使って書いたとされる『隠者の夕暮』（1780年）の著作が収録されていない。まさに、児玉先生はこの点を一番残念に思われて、このコッタ版『全集』の復刻には付録文献として1780年イーゼリン^(註2)主宰のエフェメルデン紙上に無名で載せられた『隠者の夕暮』原典（バーゼル大学図書館蔵）のコピーと1807年イヴェルドン学園の発行した『人間教育の週刊紙』に掲げられた『隠者の夕暮』と『隠者の夕暮』草稿（チューリッヒ中央図書館蔵）のコピーを加えて、それを付録別冊の第1巻として刊行した。『隠者の夕暮』の文献としてはこれ以上の歴史的価値を有するものはないとの確信をもたれ、同時に、後世のペスタロッチー研究にとっても多大の歴史的意義をもつとの理由でこのコッタ版原典を復刻することになったのである。

3. コッタ版『全集』各巻の主な作品名と内容概要について

コッタ版『ペスタロッチー全集』全15巻の目次と主要な著作の内容紹介

第1巻『リーンハルトとゲルトルート：民衆のための書 第一部 第3版』1819年 320頁。

第2巻『リーンハルトとゲルトルート：民衆のための書 第二部 第3版』1819年 372頁。

第3巻『リーンハルトとゲルトルート：民衆のための書 第三部 第3版』1819年 436頁。

第4巻『リーンハルトとゲルトルート：民衆のための書 第三部 第3版』1820年 407頁。

第5巻『ゲルトルート児童教育法』1820年 281頁。

ペスタロッチーの教育家としての地位と名声を確立した主著で、近代教育思想や教授理論の成立史上、極めて重要な意味を持つ作品。14通の書簡からなる。学問を民衆のものにすることにより、民衆の人間の解放を図ろうとする信念のもとに、知識の陶冶、身体陶冶、そして道徳・宗教の陶冶についての教授論が展開される内容になっている。

第6巻『わが時代とわが祖国の純真者に訴える』1820年 392頁。

1813年から1815年にかけてのヨーロッパの政治的大変革の時期に書かれた社会哲学、歴史哲学的論文で、「第二の探究」とも称しうる作品。『探究』における三つの状態（動物的、社会的、道徳的状态）に代わって、動物的状態と人間的状态の二つを対置し、それを「文明」対「文化」ないしは「集合的存在」対「個人的存在」の対応で説明する。人類社会、文明の墮落に対する唯一の救済手段を教育に求め、家庭生活と母子の関係とがもつ文化の形成力の重要性を強調している。

第7巻『探究』〔正確には『人類の発展における自然の歩みについての私の探究』〕1821年 408頁。

一個の人間、および人類の状態を、自然（動物的）状態、社会的状態、道徳的状态の三つの段階に分けるといふ独特の思考様式をとり、「人間とは何か」という根本問題に迫っている。教育学的には、「環境が人間を作る」といふ単なる環境教育学の域を脱し、「環境を作るのも人間」とする人間の倫理的自律、ないしは教育の自己活動の原理を、環境との関連で明確にしている点は特に重要である。

第8巻『立法と嬰兒殺し』1822年 374頁。

当時頻発した未婚の母の嬰兒殺しという事件に関し、その防止策を問う懸賞論文に応募した論文である。嬰兒殺しの究極的原因を探り、罪を犯し死刑に処せられていく不幸な少女たちに同情する立場から、人間の本質、真の立法の精神、国家と道徳の関係などの問題を追及している。犯罪防止の方法は、非人間的な過酷な刑法ではなく、人間愛に基づく人心の純化であるとし、具体的な法改革のあり方にも触れている。

第9巻『ペスタロッチーからある友への手紙』『産業、教育および政治に関する意見』他1点を含む 1822年 300頁(内容については省略)。

第10巻『私のABCのテキスト』1823年 384頁(内容については省略)。

第11巻『基礎陶冶の理念に関する見解と経験』1823年 371頁。

ペスタロッチーがイヴェルドンに移った直後の、学園も彼自身の生活ももっとも安定していた時代に書かれた、方法（メトーデ）についての体系的で、秩序立った、かつ明瞭な論文。人間の諸素質と諸能力を分析し、感性、知性、感情、意志、行為として把握し、それらが調和し、一つの全体をなすことが重要だとする。そのような諸素質、諸能力を育成し、展開させるには、父と母の愛により育まれる愛の力が基本であることを説いており、彼の「方法（メトーデ）」論の総括をなす著作といえる。

第12巻『クリストフとエルゼ』1824年 496頁。

内容は農民のクリストフとその妻エルゼが雇い主と一緒に『リーンハルトとゲルトルート』を読み、この小説の話とその背景について幅広い解説を加えたもの。この書は、『リーンハルトとゲルトルート』の主要観点をより分かりやすくするためにペスタロッチーはこの『クリストフとエルゼ』、すなわち「民衆のためのわたしの第二の書物」を書いたと言っている。この本は1781年の秋印刷され、1782年に刊行されている。この本でペスタロッチーが用いた文学的形態は、読者に対して厳しい要求を突きつけるものであった。そのせいか、この作品は期待された実を結ばなかった、との評がある。

第13巻『白鳥の歌』1826年 346頁。

ペスタロッチー最晩年の著作で、基礎陶冶の理念に関する叙述と、彼の事業の発展や衰微に関わらせた自伝的叙述との二つの部分からなる。前半では、基礎陶冶の個々の領域を重視しつつも、それらを教育全体の部分として位置付け、知育、徳育、体育による個別的な力の発展よりも、それらを結び付け、統一する「一般力」の発展、強化をこそ教育の目的とする（調和的な陶冶の強調）。また、「生活が陶冶する」（Das Leben bildet.）として、現実の生活、居間のもつ教育上の意義を力説している。後半の自伝的部分は、時折過酷なほどの自己内省を含む主観的叙述ではあるが、ペスタロッチー伝の資料としても重要である。

第14巻『実践的基礎訓練』1826年 304頁（内容については省略）。

第15巻『実践的基礎訓練 形と数（図版5枚入り）』1826年 398頁（内容については省略）。

4. コッタ版『全集』復刻に当たって、付録別冊2冊が加えられた経緯について

このコッタ版『全集』の復刻に当たっては、付録別冊として前述の『隠者の夕暮』（別冊・そのⅠ）を添えて出版すること、また、ペスタロッチーより幼児教育に関する手紙を受け取っていた英国人グリーブスの『幼児教育の書簡集』（別冊・そのⅡ・英文原典初版は1818年に刊行）のコピーを加えて出版することになった。

{『隠者の名暮』を添えて}

①付録別冊第1巻目の『隠者の夕暮』各版について

付録別冊第1巻目には、『隠者の夕暮』^(注3)にかかわる各版の原文が掲載されている。

以下、目次に記載された7種類の各版のタイトルとここに収録した7種類の編集意図は次の通りである。

原書名：Die Nachschlagewerke ueber J. H. Pestalozzis Abendstunde eines Einsiedlers

内容（この書には『隠者の夕暮』の出版年の異なる7点が収録されている）

I. Abendstunde eines Einsiedlers. [5~38 頁] Nach der Ephemeriden. 1780.

これは一番最初に出された『隠者の夕暮』（1780年5月）は、イーザーク・イーゼリンによって刊行されていた『人間性』雑誌（別名・道徳 政治 立法のための書誌）に載ったペスタロッチーの論文である。

II. Abendstunde eines Einsiedlers. [39~70 頁] Nach der Wochenschrift fuer Menschenbildung. 1807.

この1807年に出された『隠者の夕暮』は『人間教育のための週刊紙』に掲載されたものである。これはペスタロッチー生存中に出された唯一の版である。ペスタロッチーの協力者であったニーデラーによる校訂版である。

III. Abendstunde eines Einsiedlers. [71~98 頁] Als Beilage V zum 2. Band der Geschichte der Paagogik. K. v. Raumer. 1843.

この1843年に出された『隠者の夕暮』はラウマー（Karl von Raumer）の『教育学の歴史』の第二巻に掲載されたものである。これは1807年刊『週刊紙』によって校訂されたものである。

IV. Pestalozzis Briefe an I. Iselin. (1779-1780) [97~107 頁]

これは一番最初に『隠者の夕暮』原稿を『人間性』誌に載せてくれたイーゼリン（I. Iselin）宛ての書簡6通（9. Juni 1779. ~Ende 1780）。

V. Entwurf zur Abendstunde eines Einsiedlers. [109~140 頁] Uebersetzung aus dem Manuskript.

これは兎玉三夫先生によるスイス中央図書館所蔵のペスタロッチー自筆草稿写本から活字に起こしたもの。

VI. Entwurf zur Abendstunde eines Einsiedlers. [141~158 頁] Pestalozzi Semtliche Werke (Kritische Ausgabe) 1. Band. 1927.

これはシュプランガーなどの編集による批判版と呼ばれる『ペスタロッチー全集』の第1巻目に掲載された「隠者の夕暮」の草案である。

VII. Entwurf zur Abendstunde eines Einsiedlers. [16 folding sheets] Manuskript Pestalozzi. Zentralbibliothek ZUERICH.

これはペスタロッチー自身による『隠者の夕暮』自筆草稿の写本（スイス中央図書館所蔵の写本〔Ms. Pestal. 304〕による）

②付録別冊第2巻目のグリーブズ^(註4)『幼児教育書簡集』について

この書簡集は、イギリス人J・C・グリーブズ宛の幼児期教育に関する手紙をまとめたもの。全部で34通（1818. 10. 1付けの第1通から1819. 5.12付けの第34通まで）の手紙である。グリーブズは1817年から1822年までイヴェルドンに滞在したが、ペスタロッチーはグリーブズを通してイギリスに若干の影響を及ぼしたいものと望んでいたと思われる。

5. コッタ版以後の『全集』各版について

{二十世紀の決定版}・・・ペスタロッチー研究文献の出版の経緯について触れている。まず、過去出版されたペスタロッチー全集及び選集について。

- i. ザイファルト編のブランデンブルグ版『ペスタロッチー全集』（全18巻・1869-72年刊）^(注5)
- ii. リークニッツ版『ペスタロッチー全集』（全12巻・1899-1902年刊）
- iii. ブッヘナウ・シュブランガー・シュテットバッハー編『ペスタロッチー全集』（全26巻刊行予定・1926年刊）
この版はいわゆる批判版といわれて20世紀の決定版である。平成8年現在 29巻まで刊行されている。
- iv. ラッセル版『ペスタロッチー全集』（全10巻・1945年刊／生誕200年を記念しての全集）
- v. マン編『ペスタロッチー選集』（全4巻・1869-71年刊）

上述5点の『全集』・『選集』の中では、iii.に当るブッヘナウ・シュブランガー・シュテットバッハー編『ペスタロッチー全集』のいわゆる批判版が〔二十世紀の決定版〕であると評価する一方で、これら5点の『全集』や『選集』に比べ、ペスタロッチー生前唯一の『全集』であるコッタ版こそは、たとえ編集上の不備はあるにせよ、全集としての価値はいささかも減ずるものではなく、むしろペスタロッチー歿後の諸編にみられぬ品位と権威を具備している、と最大限の評価をしている。

そして、このコッタ版『全集』復刻の意義を次のように述べている。

「このコッタ版『全集』は現在の日本では勿論、ヨーロッパでもなかなか完揃えを入手することは困難である。私は機会あってこのコッタ版ペスタロッチー全集（15巻・1819-1826）完揃えを二部所蔵しているが、ペスタロッチー研究には不可欠の原典であり、歴史的価値を有する文献であると考え。今後この原典の復刻版の半数でも保存されれば、後世のペスタロッチー研究に資すること多大であると思う。」

6. 児玉三夫先生長年の「ペスタロッチー研究」の功績によりペスタロッチー教育賞を授与される（広島大学から顕彰される）

1) ペスタロッチー教育賞とはどういうものか

（ペスタロッチー教育賞 第3回 の授与式は1994年11月18日（金）に行われた。）

以下は当日配布のパンフレットより要約したものである。

i. ペスタロッチーの略歴

シュタンツでの孤児救済の活動を経て、1800年ブルクドルフ、1804年イヴルドンに学園を開く。学園は、多くの国々から参観の人々が集まり、教育実践研究のセンターとなって、ヨーロッパ、アメリカにペスタロッチー運動が広がる。

1825年、弟子たちの内紛から、学園を閉鎖して、ノイホーフに退き、1827年ブルックにおいて没す。82歳。

ii. 広島大学がペスタロッチー教育賞を設立した趣旨について

「今日、我が国の極めて困難な教育状況の中で、優れた教育実践をおこなっている個人あるいは団体を顕彰するため、先のペスタロッチー賞の精神を継承し、ここにペスタロッチー教育賞を創設した。その趣旨として、以下のことが挙げられる。「この賞は混迷する教育の現実に対して、教育の原点を示し、我が国教育の立ち直りのきっかけにしよう

とするものである。その象徴としてペスタロッチーの名が称えられよう。ペスタロッチーは民衆教育の父であり、教育の実践家として、子どもへの限らない愛情と慈しみを身をもって示した教育者であった。・・・中略・・・ペスタロッチーの実践・思想・理論には、今日の教育荒廃を克服するための方途を示す力があると確信される。ペスタロッチーの精神を教育の原点として捉え、優れた教育を実践している人々を顕彰することは、正に今日の教育にとって「地の塩」となる。」

このことを受けて、広島大学教育学部では、ペスタロッチー教育賞実行委員会を設置して、「ペスタロッチーの精神を教育の原点として捉え、優れた教育を実践している人々」を顕彰することになったという。

2) 児玉三夫先生が授賞された主な理由

「ペスタロッチーの生前に唯一刊行された稀覯図書、コッタ版『ペスタロッチー全集』（全15巻）を復刻し、『隠者の夕暮』草稿写真版を含む『ペスタロッチー参考文献集』（全2巻）を編集出版したことは、我が国のみならず、世界のペスタロッチー運動にとって、はかりしれない貢献であるといえる。」

このことの持つ意義をもう少し詳しく取り上げておきたい。

児玉先生は「ペスタロッチー研究」に当たってペスタロッチーがいかに苦勞して彼の生存中唯一の『全集』を出版するに至ったか、著作一つずつにわたって検討され、中でも『隠者の夕暮』についての書誌学的視点からの研究では沢山の新事実を明らかにされるほどの精密で鋭い研究をなされたことが評価されたということである。

おわりに

昭和44年から約5年間大学院在籍中、児玉研究室に所属していた私は児玉三夫先生から「文献講読」「教育学演習」などの授業で、教育学の古典といわれるペスタロッチーの『隠者の夕暮』やヘルバルトの『一般教育学』の原典講読の授業に出席させていただいた。授業では先生から文献学・書誌学的視点からの研究の大切さを教えていただいた。このことについて、以下2点、当時のことを思い出しながら触れて見たい。

本文にもあるように、ボルノー博士が昭和47年11月17日に明星大学に講演に来学された折、児玉先生がコッタ版『全集』のもつ書誌学的な意義について話題にされた中で、ボルノー博士も同『全集』の復刻は大変ペスタロッチー研究を深めるために大いに役立つ画期的な企画であると同様喜ばれた、と話されたことを思い出す。また、先生が虫眼鏡を使って丁寧に『隠者の夕暮』の手書き自筆草稿から活字におこされた時の苦勞話も思い出される。それはシュプランガーなどの編集した批判版『全集』でKnecht（男児、下僕の意）と活字になっているところは、先生の判読されたところに寄ればKnabe（子どもの意）と読めるのではないかとの疑問を呈されたこと、など実証的に検証することの大切さを教えていただいたことなどを挙げておきたい。

注

注1・ボルノー博士／実存哲学

ボルノー（**Bollnow, Otto Friedrich. 1903~1991**）

ドイツの哲学者、教育哲学者。シュプランガーやノールに学ぶ。一時ハイデガーの強い影響を受け入れたが、やがてディルタイ（Dilthey, W. 1833~1911）の歴史的な生の哲学と実存哲学との深い緊張関係の中で独自の思想を形成、発展させた。そこから、もともとディルタイの意味での精神科学の方法論である解釈学をはじめ、言語哲学、認識の哲学などの領域の著作が生まれた。特に教育学の領域では、実存哲学が提起した人間の非連続面に根

差す深い人間理解から汲み出された非恒常的な教育形式（出会い、危機、冒険、訴えかけ、覚醒など）の意義を強調し、伝統的な教育理解をも含めて、そこから教育と人間の全体を問い直し、とらえ直すことの重要性を説く。

注 2・イーゼリン (Iselin, Isaak. 1728-82)

汎愛派の教育家。彼は、ノイホーフ貧民学校の閉鎖で失意と屈辱のなかにあったペスタロッチーの精神を理解し、鼓舞し、ペスタロッチーの最初の労作である『隠者の夕暮』を『エフェメリデン (Ephemeriden der Menschheit) 誌』、(1780年5月号)・〔この雑誌はイーゼリンが主宰し編集した政治、文学、教育、哲学に関する定期刊行誌である〕に掲載した。また、『リーन्हルトとゲルトルート』の出版や『スイス週報』の創刊も彼の援助によって実現した。このように彼はペスタロッチーにとって、よき理解者であった。そのことはペスタロッチー自身が、彼にあてた追悼演説『イーゼリンの思い出』(『スイス週報』、1782年7月)のなかで彼は「私の父となり、私の師となり、私の支柱となり、私の鼓舞者となった」と述べていることから理解できる。「イーゼリンの思い出」は1782年7月15日に没したイーゼリンを偲び、ペスタロッチーが自分の週刊新聞『スイス週報』第30号(1782. 7.25)に掲載した真情あふれる追悼文である。ペスタロッチーはイーゼリンを、自分を破滅から救い、妻に「夫」を、子どもに「父」を取り戻してくれた恩人として称えている。

注 3・『隠者の夕暮』 (Die Abendstunde eines Einsiedlers)

1780年、イーゼリンの個人雑誌『エフェメリデン』5月号(前出)に匿名で掲載されたペスタロッチーの処女作。小編ながらペスタロッチーの教育思想全体を展望させる重要な作品である。箴言風の含蓄に富む格調高い文章が特色となっている。人間の自然本性は展開を妨げられなければ善なるものとして成長するとする見解など、全般的にルソーの影響がみられる。この書の主題は、人間の本質の探求である。「王座の上にあっても、わらぶき屋根の陰に住んでいても同じである人間、その本質において、人間とはいったい何であろうか」。冒頭のこの問いが、主として教育学的観点から、また同時に政治学的・法律学的観点から探求される。抽象的・思弁的な方法でなく、感情を重んずる方法、自己の内奥を探る方法で進められる点が特徴といえる。そして、人間の基本的要求の充足は、人間にとって最も必要な内的平安と徳の基盤であるが、それは母親(父親)と子どもとの人間関係の中で成就されるし、この関係の中で必要な知識の教育も行われる。これが「自然の道」であり、「真理の道」でもあるとされている。この観点から、「言葉主義の学校」が痛烈に批判される。反面、自然の教育法が真の知識=真理へ、また真の知恵へと導く人間関係の模範として評価されている。その際、家庭が最も身近なものであり、そこでの人間関係は最も重要である。そして「人間の家庭的関係こそ、自然の第一にして最も卓越した関係である」として、人間の生活圏はこの家庭に始まり、学校、地域社会、職場、国家へと同心円的に広がるとしている。

なお、『隠者の夕暮』の副題に見い出される「親ごころ・子ごころ」という言葉も以上の視点から考えられる。つまり、具体的には子どもに対する父親ないし母親の親ごころ、臣下に対する領主の親ごころ、人間に対する神の親ごころなど。さらに、父親の親ごころが外的な実行力を軸としているのに対して、母親の親ごころは、心の秩序に重点が置かれ、物事を繊細に処理していく心として表現されている。『リーन्हルトとゲルトルート』という作品のことで言えば、アーナーが父親としての親ごころの化身であるとすれば、ゲルトルートは母親としての親ごころの化身である。また子ごころは、親の配慮を受け入れる純粋な感情であり、従順さ、感謝、愛、信頼などの心の萌芽であるという。

注 4・グリーヴズ (Greaves, James Pierpoint. 1777-1842)

ペスタロッチーのイヴェルドン学園における協力者の一人。もともとイギリスの商人であったが、アイルランドのペスタロッチー信奉者J・H・シングの感化を受け、1817年にイヴェルドンに赴く。翌18年ペスタロッチーが近郊のクリンディに開いた貧民学校において、英語教授を担任、その閉鎖後、再びイヴェルドンに移り、イギリスからの留学生の指導などにあたった。ペスタロッチーとお互いをよく理解しあい、信頼しあっていたが、こ

の二人には言葉による直接的な意思の疎通が困難であった。そこで書簡の形式をとってペスタロッチーが彼にみずからの考えを示したのが、この『幼児教育の書簡』である。

注5・ザイファルト版 (Die L. W. Seyffarth = Ausgabe: Pestalozzi Sämtliche Werke, 20 Bde., 1869~73 u. 1895, Bd. 1-18 in Brandenburg; Bd. 19-20 in Liegnitz / 12Bde., 1899-1902, Liegnitz)

ペスタロッチーの没後、100年祭を迎えるまでの間に編集された代表的な『全集』。いわゆる「ザイファルト版」には、初版にあたるものと第2版にあたるもの、の2種がある。すなわち、1869年から73年にかけて18巻が出され、後になって95年に2巻が追加された、全20巻の「ブランデンブルグ版」(Brandenburger Ausgabe)が『全集』初版。1899年から1902年にかけて刊行された全12巻の「リークニッツ版」(Liegnitzer Ausgabe)が『全集』第2版である。いずれも、ペスタロッチー研究者で教会牧師のザイファルト (Seyffarth, Ludwig Wilhelm. 1829~1903) が編集にあたったが、初版ではH・モルフが、第2版ではモルフに加えて、チューリッヒ大学のO・フンチカーが、実質的な協力者として関与している。このリークニッツ版では全体として154点に及ぶ著作・論稿が蒐集され、年代順に編纂されることになった。これは『校訂版全集』の刊行が始まるまで最も信頼のおける全集として高い評価を受けていた。

ペスタロッチー略年譜

- 1746年 1月12日、チューリッヒで外科医ヨハン・バプティスト・ペスタロッチと妻ズザンナ・ホッツの息子として誕生。
- 1751年 父ヨハン・バプティスト死去。
- 1751-54年 初等学校通学。
- 1754-63年 スコラ・アバティサーナ、スコラ・カロリーナ、及びコレギウム・フマニタティスで学ぶ。
- 1763-65年 コレギウム・カロリヌム (チューリッヒ大学の前身) で哲学、文献学を学ぶ。
- 1764年 ゲルヴェ・ヘルヴェチア協会会員となる。
- 1767年 メナルク (ブルンチュリ) 死去。アンナ・シュルテスに求婚。
- 1767-68年 J・R・チェフェリの下で農業を習得。
- 1769年 2月、ミュリゲンで農業経営者となる。
9月30日、アンナ・シュルテスと結婚。
- 1770年 8月13日、息子ハンス・ヤーコプ (愛称ヤッケリ) 誕生。
- 1771年 ビルフェルトのノイホーフへ転居。農業失敗する。
- 1774年 ノイホーフに貧民施設開設。
- 1777年 『ノイホーフ便り』刊行。
- 1780年 貧民施設閉鎖。五月『隠者の夕暮』刊行。
- 1781年 『リーンハルトとゲルトルート』第一部刊行。
- 1783-87年 『リーンハルトとゲルトルート』第二部—第四部刊行。
- 1792年 8月26日、フランス名誉市民にとされる。
- 1793年 革命論文『然りか否か』刊行。
- 1797年 『探求』刊行。
- 1798年 スイス革命。『ヘルヴェチア国民新聞』編集者となる。
- 1798-99年 12月7日—6月8日、シュタンス孤児院長。
- 1799年 7月23日、ブルクドルフで学校教員になる。

- 1800年 10月24日、ブルクドルフ城に教員養成所開設の旨広告を出す。
- 1801年 『ゲルトルート児童教育法』刊行。8月15日、一人息子ハンス・ヤーコプ・ペスタロッチ死去。
- 1802-03年 11月12日、憲法制定会議代議員としてパリに滞在。
- 1804年 6月、学園をミュンヘンブッフゼーに移転。8月末、イヴェルドンに学園分校を開設。
- 1805年 7月6日、ミュンヘンブッフゼー放棄。
- 1806年 イヴェルドンに女子学園開設。
- 1809年 『レンツブルク講演』公刊。学園の最盛期。(生徒数150名以上)
- 1810年 ヨゼフ・シュミット、一部教師を伴ってペスタロッチの下を去る。
- 1813年 女子学園をロゼッテ・カストホーファーに譲渡する。
- 1815年 『純真者に訴える』刊行。4月、ヨゼフ・シュミット、イヴェルドンに戻る。12月11日、アンナ・ペスタロッチ死去。
- 1816年 教師間に新たな闘争発生。16名の教師、学園を去る。学園衰退。
- 1817年 7月14日、ヨハネス・ニーデラーとの紛争開始。
- 1818年 9月13日、イヴェルドン近郊のクランディに貧困学校開設。
- 1819年 クランディの施設放棄、イヴェルドン学園に併合。学園、ニーデラーとの闘争により、社会的信用を失う。
- 1824年 ニーデラー対ペスタロッチの訴訟、ペスタロッチにやや有利に決着。ヨゼフ・シュミット、ヴァート州から追放処分。
- 1825年 3月、シュミットの州外追放に伴い、ペスタロッチ、学園を放棄し、ノイホーフに戻る。5月4日、シンツナハのヘルヴェチア協会会長に選ばれる。
- 1826年 『ブルクドルフとイヴェルドンにおける教育施設の校長としてのわたしの生涯の運命』、『白鳥の歌』刊行。
4月26日、『ランゲンタールの講演』公刊。
- 1827年 2月初め、ニーデラーの影響のもとでE・ビーバー『ペスタロッチ伝への寄与』公刊。ペスタロッチ、発病。
2月15日、医者監督を受けるため、ブルックに移る。2月17日、ブルックで死去。2月19日、ビル村の学校に埋葬。
- (出典 M・リートケ著 長尾十三二他訳『ペスタロッチ』より抜粋)

引用文献・参考文献一覧

1. M. リートケ著 長尾十三二／福田弘訳『ペスタロッチ』理想社 1985年
2. H. ロート著 川村覚昭 下山田裕彦訳『ペスタロッチーの人間像』玉川大学出版 1991年
3. W. クラフキー著 森川直訳『ペスタロッチーのシュタンツだより ―クラフキーの解釈付―』東信堂 1997年

(おことわり)

「ペスタロッチ」「ペスタロッチー」の両方の表記について

原則として文献の中で使われている通りの表記に従い、統一してありません。